

藤崎優次郎 賞 受賞記念 講演

答えは現場にある

山下 哲 生 (養豚コンサルタント)

Yamashita T.(2008). There is the answer in the farm.

Proc. Jpn. Pig Vet. Soc. 53, 1-3

日本の養豚産業は、日本の農業の中では、特に、利益率が高いことが上げられます。つまり、儲かってきた産業なのですが、かつて、80万戸近くあった生産戸数は、いまや、7000農場にまで、激減してきました。そのなかで、総飼養数が、900万頭をどうにか維持できているのも、企業的養豚が、かなりの数を占め、やめて行く、零細経営の部分を吸収したためともいえます。

私は、ここに参加された、多くの会員の方々とは、異なり、畜産とは、全然関係の無い、文系の立教大学文学部出身です。卒業した、1976年は、日本経済がオイルショックにみまわれ、不景気の真っ只中でした。しかし、そういうときに限り、不思議と養豚業界は、高豚価で、景気がよかったとおもいます。

これは、不思議なもので、今年の豚価の上がり方をみても、景気の悪化が、世間では、言われているときに、豚の値段はそこそこに、良いように感じています。私が、この業界に入ったのは、実際、就職がなかったからです。また、学部学科不問、健康であること、大卒50名募集という、日本の企業的養豚の立役者の一人で、「全豚」を組織した曾我の家農興(株)の門を叩いた事からはじまりました。当時、神奈川にあつた、本社を訪れ全豚の初代会長であり、曾我の家農興の社長もつとめられていた、曾我達夫氏から、面接をうけました。内容は、おぼえていませんが、お昼に出された、「カツどん」を目の前で、ペローと平らげたところ、「じゃー来てもらいましょうか」ということで、採用になりました。

後で聞いたところ、「現場仕事では、飯を早く食えるやつは、馬力あるから 採用するのが得」という判断からだとききました。

仕事は、群馬で、母豚1000頭近くを飼養する農場で豚の管理をすることでした。この、カツどん の食べ方で入社できましたが、同期で40名近く多士済々のメンバーがあつまりました。そのうち半分は、理系で、

農業畜産関係でした。のこりは、私のような文系で、畜産とまるっきり関係ないものが、集まりました。いわゆる、前提となる豚に対する知識が、まるでなかったものですから、とにかく、ありのまま、現場の状況を受け入れ、会社が供給するマニュアル、アメリカの翻訳文献をむさぼるように勉強するひびでした。

そういうなかで、どちらかというと、畜産を専攻した、新入社員から、「こんなのは、養豚ではない!」とほんの数ヶ月で、止めて行く者が続出しました。私は、頭に描いた養豚像がまるでなかったのも、とにかく、現場の豚にあわせるのが、精一杯で、したが、気が付けば、40数名いた、同期も、1年たつと10名以下にへっていました。それでも、「豚にとっては、管理者が主人であり、管理者の手に、豚の命は預けられている」という言葉は、命の大切さを考える上でも、ずっしりと響くものでした。曾我の家農興という、日本の企業養豚に最初に就職できたということは、わたしにとっては、一番の原点でした。そこで、たたきこまれたのは、「勉強すれば養豚は、儲かる」「情報は、身銭をきっても買え」「システムとしての養豚を考え構築しろ＝オールイン オールアウトの実践」でした。

その後、いくつかの企業的養豚で、働かせいただいたあと、いつも感じていた疑問「自分は、表面の技術は、わかっている、その基礎となる豚の基礎がわかっていないのでは」

特に、文系で畜産の基礎が出来ていないという思いから、海外で、短期集中で、勉強するところがないか、探していたところ、見出したのが、特に育種が盛んで、農業教育で、秀でていたイギリスです。そこに、短期の養豚農場長の養成コースがあると聞いて、1990年渡英して、英国中部のビショップバートン農業大学のストックマンコースに入学しました。

入ってビックリしたのは、大學自体が、企業養豚を経営していること(母豚350頭の一貫経営)それが、優秀な成績 1母豚23頭出荷をあげていること、なおか

つ、実習希望の学生からは、「実習費を徴収して農場の仕事させている」点でした。そして何よりも、現場に役立つ、実践教育が売り物で、週ごとに変わるカリキュラムには、大学内の教育スタッフではなく、実際の養豚家、メーカー、飼料会社の技術員など、現場を実際に担っている人達が、スピーカーとして参加してくるのです。短い、経験でしたが、これを日本ででも是非普及させなければと、志を立て、1993年から「養豚塾」を開講しました。それまで、畜産関係の講習会といえば、まず、無料で、懇親会はつきもの、偉い先生の話聞かせていただくというのが、基本でした。そのなかで、有料で受講料をとり、かつ現場の話では？との声をよそに現場で働く人達を講師にして現在まで120講座を開講し、受講者は延べで2500名近くになっていると思います。

情報は、身銭を切って集める。そうであればこそ、身に付く、そして、受講料をはらえば、皆、同じ土俵で勉強できるというのも、養豚塾の特徴です。また、より解りやすい語り口で、読んでもらいたいという思いから。「です。ます。」調で書き下した「企業養豚ハンドブック」をチクサン出版社から1993年に出してもらいました。2005年には、ビショップバートン大学で、すべての養豚産業従事者向け発刊されていた教育シリーズ本のうち「飼養管理の基礎」2006年に「養豚と飼料」そして、今月、今話題になっているアニマルウェルフェアの根本にある「豚の行動学」を「養豚情報」で、おなじみの鶏卵肉情報センター社より刊行してもらいました。これら3冊の本はできるだけ現場の人に解りやすいように言葉を選び翻訳しかつ「日本のストックマンのために」という独自解説を要所要所に配して、理解がより進むようにしました。これらは、現場に役立つ実用書として、活用されています。

今回、藤崎裕次郎賞に推挙された、もう一つの理由として、豚コレラ撲滅の運動を立ち上げたことに対する評価していただいたときいております。

私が養豚業界に入ったころ、一番問題になっていたのは、PSSといった、白く水っぽい肉が出来ることでした。それは、このような肉を生む遺伝形質を持った種豚群が、現場に入ってきたからです。このPSSの資質を持った豚は、神経質で、筋肉質、ストレスに極めて弱いものでした。出荷すると、移動ストレスで、かなり死んでしまうような豚でした。

これは、科学的には、このようなストレスをもった、豚群に対しては、ハロセンガスを使い、ストレスに感

受性があるかどうかを試し、このキャリアーとなる種豚を繁殖群から排除することで、徐々に、減少していききました。

現場で同じく悩まされたのは、子豚の下痢、呼吸器病のもとである、肺炎でした。これらは、感染症と言われていましたので、抗生物質、抗菌剤の投与で、押さえ込みにかかりました。薬剤残留の問題が、今日ほど問題になっていなかった当時は、「利けばいい」「もっと利く薬剤、新しい抗生物質はないか」と動物薬品の営業マンをつかまえ、聴いたものでした。その中で、必要不可欠打てば必ず効くというワクチンが、豚コレラワクチンで、ワクチンの中では、別格の扱いであつたと思います。しかし、当然のものとして、打っていた豚コレラワクチンが、養豚先進国では、ほとんど、接種されていないこと。これは、発生した場合には直ちに淘汰するという「エラディケーション」がとられてきたことです。

日本では、打てば効くという、すばらしい豚コレラワクチンがあり、この接種で発生は、大幅に抑えられてきました。また、この接種には、官民ともに、100%接種をおこなうために、各地で防疫組織がくまれました。ワクチンを打てるのも指定された獣医、ワクチンの供給も畜産物衛生指導協会そのため国からの財政支援も手厚くなされていました。

すぐにでも、100%接種、検証、ワクチン中止という、撲滅政策がとれたはずですが、100%接種体制は、つくれても、なぜかワクチン接種中止の話は、でていませんでした。

当時私は、コンサルタントとして、養豚の現場指導に携わっておりました。そのなかで、ワクチンを打たねばならないことへの不満、特に、離乳ストレスから回復期にある子豚が、ワクチン接種で痛むという声を結構聞きました。また、輸入豚肉の増大で、相対的に相場が低迷しているとき、特に当時は、台湾が最大の豚肉輸出国でしたが、豚コレラフリー宣言をすれば、これらの国々からの輸入は、防疫ルールを根拠に止められるというメリットも見えていました。

撲滅運動を提起したのは、平成7年(1995年)阪神大震災の年であったと思います。

これを、養豚生産者団体にいきしたところ、大いに賛同が得られました。と同時に、理論武装の必要も感じ、豚コレラワクチン開発の最大の功労者 熊谷哲夫先生に毎回のように御足労を願い、研究会を組織し、「撲滅できないことはない」との確信をふかくもちまし

た。「撲滅の方向は、間違っていない」この中で、盛り上がりがうまれてきました。その流れの中で、全国の養豚生産者に呼びかけ、豚コレラ清浄化実行委員会という、立場を超えた、組織を立ち上げワクチン接種を徹底し、1999年までにフリー宣言をだすことを、当時の畜産局衛生課に要望しました。

清浄化実行委員会では、自主連帯の立場から、独自にカンパをつのり、「豚コレラ撲滅の道」という、小冊子を30000部作り全国の生産者に送付しました。また、行政への働きかけも強化し、その力もあり豚コレラ撲滅体制確率事業が、開始されました。

この事業は、昨年2007年の3月31日で、国際的にフリー宣言をだすことで、完結しました。この運動が、生産現場から起こったこと、そして、その嚆矢の一端を担えたことは、私自身も現在は、養豚経営をいとなんでいます、誇りに思えます。なぜなら、ワクチン接種の回数が1回減らせ、豚にも、人にも良い状態をつくりだしたからです。

迷ったら、「原点に戻る」こと。そして「答えは現場にある」こと。この2点は、これからの、養豚産業で、忘れてはならないことだと考えます。

終わりに、「豚コレラ撲滅への道」に、掲載された「豚コレラ清浄化アピール」を、再録して、おわりにしたいとおもいます。

これは、平成7年11月に出されたものです。

豚コレラ清浄化アピール 豚コレラ清浄化実行委員会

私たちの産業のために
私たちの消費者のために
私たちの豚のために
豚コレラを清浄化＝撲滅しよう

私たちが今、決意し、行動することで、日本の養豚産業は大いに元気になります。豚コレラを清浄化できないがために私たちは、清浄化＝フリー宣言している国々と比べ、何倍もの衛生費の負担をしいられています。

一方、私たちの消費者に対しても、日本の養豚産業がいまだに豚コレラを清浄化出来ていないことは、輸入豚肉との差別化を図ること、国産豚肉の信頼性を高めるうえでのウィークポイントとなります。(デンマーク、アメリカは、ともに豚コレラ清浄国) また、

離乳のショックから立ち上がり、回復期にある子豚たちに注射をすることは、大きなストレス要因となり、その発育に悪影響を与えます。

何よりも大切なことは、豚コレラが、私たちの決意と実践、関係機関の協力で容易に清浄化できるということです。確かに、その方法をめぐっては、いろいろな議論があります。しかし、清浄化できないという議論は一つもありません。問題は、私たち、そして私たちを含めたすべての関係者の清浄化にむけての情熱と実践、それによるプログラムの実行です。

豚コレラ清浄化＝フリー宣言の実現は、日本の養豚産業に活力と自信を与えます。他の課題となっている衛生問題に対しても、新たな取り組みと展望を開くことが出来ます。文字どおり、この問題の解決のなかに私たちの未来はあるのです。

私たちの情熱と団結、問題解決への固い決意のもと、関係機関、すべての業界関係者の協力を得て、日本の豚コレラ清浄化＝フリー宣言を実現し、養豚産業を元気にしましょう。